

# 碩心

社団法人 日本詩吟学院岳風会 認可  
 神奈川 碩心会 発行

現在 63年9月  
 会員数 169名  
 地区別 275名  
 地区別 59名  
 合計 (503名)

63年9月号 (194)  
 発行 者 岸 岳 集  
 編 者 根 岸 岳  
 中 村 愛 岳

## 全国青少年 東日本吟道大会終る

夏休みも終りに近づいた八月二十一日、鎌倉中央公民館分館に於て、右会が行なわれました。

会場は、早起きをして遠くから馳せ参じたチビっ子少年少女達で埋まった。文字通りりりたるような猛暑の中、九時四十分修礼国歌斉唱の後、女子学生の若さ溢るる開会の言葉があり、いよいよ「少年の部」の吟詠となる。いつもの大会と異り、舞台はつぎつぎに可愛いチビっ子達が、大人顔負けの吟を披露し、盛んに拍手を受ける。

冷房設備のない館内はまるで扇子の花が咲いたように揺れ動く。第二部「青年の部」も仲々立派な吟が多く、我々ももつと勉強しなければと思う事しきりであった。プロに多少の変更があり、都合で式典が早まった。松井岳洋先生のお元氣な姿もあり嬉しかった。

昼食の後、構成吟に移り「鎌倉探訪」のスライド吟詠にしばし昔を偲び、小学唱歌「鎌倉」を全員で合唱、和氣藹々のムードとなる。

第三部「賛助吟詠」で私達碩心会も女子35名による「常盤孤抱図」を熱吟、第四部

「大会役員吟詠」と続き、残暑の中無事終了。

最後に少年の部・青年の部の中から各独吟が五題、合吟が三題ずつ優秀賞として選ばれ将来に期待をかけられました。そのあと万才三唱で有意義な大会の幕がおりた。

岩崎記

(碩心会からの優秀賞受賞)

独吟の部 根岸 由佳

合吟の部 磯村 朋風他

(碩心会からの参加出吟)

合吟・大楠公(少年の部) 池田亜砂子他

独吟・富士山( ) 根岸由佳

合吟・偶成(青年の部) 磯村朋風他

構成吟・鎌倉探訪より 小菅幸風

合吟・常盤孤抱図(協賛吟詠) 磯村朋風

合吟・神州(役員吟詠) 中村愛岳他

合吟・神州(役員吟詠) 加藤岳相他

## 全国青少年吟道大会所見

石渡 桂岳

少年の吟声透る爽やかに

舞扇踊り浴衣の三少女

十三夜心の和む親子吟

尺八を吹く紋服も残暑中

合吟が揃しかとも夜の秋

◎ 総本部・幹事に

役員が若がえりの主旨のもと、63・64年度総本部の事業執行に際して、委員と協力して運営に携わる幹事として傾心会から左記三名が委嘱されました。

加藤圭岳・立沢御風・松井正風

◎ 高段者審査の一部変更について

昭和62年3月30日付七段認可の方は

(昭和64年春に県本部で八段受審)

昭和63年3月30日付七段認可の方は

(昭和65年春に県本部で八段受審)

右該当以外の七・八段審査は傾心会で行ないます。(許証部)

昌泰三年九月十日(旧暦)

重陽の節句の翌日(九月十日)  
秋思の詞

中国では二千年も前から、九月九日を重陽の節句とし、旧暦を用いていたので「菊の節句」ともいわれる。古くは日本でも行われていて、菅原道真が、重陽の節句の次の日の九月十日、宮中の宴に於て勅題「秋思」を賜わり奉答したのが「九日後朝同に秋思を賦して制に応ず」で、翌年の九月十日、太宰府に流されの身となって断腸の思

いで詠んだのが「九月十日」の詩である。

天正五年九月十三日

七尾城落つ(九月十三夜)

上杉謙信は天正五年(一五七七)に兵三万を率い、加賀に入り金沢を陥れ、進んで能登の七尾城を攻め、九月十三日遂にここを落とし、二日間兵を休息させ、この時「九月十三夜」を詠んだという。故郷の者どもが、わが遠征を心配していようとどうでもよいと、いかにも豪傑ふうに詠み、そこがかえってしみじみとした情趣がただよい、九月十三夜の月の光に照らされた、文雅な武将の面影が偲ばれる。

大正元年九月十三日

乃木夫妻殉死(雙殉行)

明治四十五年七月三十日に明治天皇崩御、そして九月十三日御大葬の日、乃木希典は静子夫人とともに殉死、享年六十四才。教本二巻50頁、竹添井井の「双殉行」はこの時のことを詠んだものである。乃木夫妻の殉死の報道は、さまざまな波紋を呼び、当時唯一の報道機関であった新聞は、どの新聞も乃木將軍の記事を満載、人々はくりかえし終日新聞の記事を読んで過したという。

乃木希典は西南の役の時、連隊旗手が戦死のため、旗を奮われた責任、又日露戦争時に旅順攻略戦で、多くの部下を犠牲にしたことも加え、明治天皇の崩御に際して、あとを追ったといわれる。

当時の報道によると、殉死の朝は早くから起きて水を浴び、朝食後、出入りの写真屋を呼んで夫妻は一緒に写真におさまった。もう覚悟は出来ていたのであろう。

宮中へ最後の参内をした夫妻は、赤坂新坂町の自宅へ戻り、午後はふだんと変らない時間を過ごし、夕食も終り、家人は少しも気が付かなかったという。

霊柩車が皇居を出たのが午後八時、一分ごとに弔砲がとどろく中、乃木希典は明治大帝の写真を飾り、軍装のままその前に正座し、二尺二寸九分の兼光の軍刀で腹を十文字に切った。静子夫人はかたわらに端座し、懐剣で、左胸を突き刺して絶命した。それを見とどけた將軍は軍刀を持ちかえ、膝で柄をおさえ、頸部を下から刺し通した。

希典の辞世

うつし世を袂去りましし大君の

みあとしたひて我はゆくなり

静子夫人の辞世

出でましてかへります日なしときき

けふの御幸にあふぞかなしき

## ” 秋 ”

岩崎忠岳

蛸や子は夕鳩の輪の中に  
蛸や出店ほつゝ荷をたたく

高梨誓岳

妻の歩にあわす坂道蟬しぐれ  
枝豆やひとりの酔を深めゆく

南部越岳

連なれる岩礁のしづき秋気立つ  
ウインドサーフィンきらめく波に見えかくれ

山口夕岳

山の湯や灯ほのかに秋蛾来る  
安達太良を遠目に花野一本道

佐久間爽岳

潮騒の遠くありけり虫の聞  
ひとひらの雲が秋思の湖へ

板橋雅風

山荘に遊ぶ童や蟬時雨  
一湾の藍おだやかに萩の花

後藤道風

道おしへ跳んで童心たぐりよす  
石蹴りの石にはじけて鳳仙花

中村愛岳

旧街道とんぼ群とび昼静か  
ざわめきは雲の彼方に秋の海

## 白虎隊余話

来る十月二日、福島に於て全国吟道大会が行われ、神奈川県本部では例年の如く吟行会を兼ね、今年のコースの中に、会津若松、鶴ヶ城、飯盛山などがあります。拙文で紙面を埋めることにいたします。

(ある会津藩士の死)

昭和六年、仙台で一人の退職官吏が世を去りました。旧会津藩士、のちに通信省の技師となった飯沼貞雄という人。彼は職を辞したのちも、ついに生まれ故郷には帰らず、なぜか会津の地にはめつたに姿をみせなかつた。ただその遺言には、自分の骨をはるか会津の山河を見はるかす飯盛山上に埋めてほしいとあつた。

死のまぎわまで、この老人の胸のうちに去来したものは何であつたか。それを知つた人びとは、一人の老人の中に、歴史がなまましく息づいていることを改めて感じずにはいられなかつたであろう。

この人こそ、会津戦争のさなか、飯盛山上で最後を遂げた白虎隊二十人のうちの、ただ一人の生き残りであつた。そして飯沼貞雄の残した聞き書きから、白虎隊の悲惨な物語りがはじめて世に現れたのである。

(会津鶴ヶ城)

南鶴ヶ城を望めば砲煙颯る  
痛哭涙を飲んで且つ彷徨す  
宗社亡びぬ我事畢る

十有九士腹を屠つて僵る

この「白虎隊」の詩はあまりにも有名です。しかし、この少年達が運命を共にしようとした会津鶴ヶ城は、実際にはこの時まだ燃えていなかった。少年達が鶴ヶ城と思ひこんだ炎と煙は、官軍の手で焼き払われ城下の民家から立ちのぼっていたものである。白虎隊の少年達が、みづから命を絶つたのは慶応四年(一八六八)八月二十三日、年号が「明治」と改まる十数日前のことである。そして白虎隊自刃のあと、この城をめぐって一ヶ月に及ぶ凄惨な攻防戦が続けられたのである。

九月二十二日、三千人の戦死者を出して会津軍が降伏した時にも、鶴ヶ城天守閣はまだ残っていた。会津落城ののちも、砲弾に傷つきながら、会津の悲しい歴史を秘めて建っていた鶴ヶ城は、明治七年、時の陸軍省の強硬な命令で取り壊された。

会津市民待望の天守閣復元が成つたのは昭和四十年九月のことであつた。あれから百余年の歳月がたつた。飯盛山を染めた少年達の血潮も砲声も歴史の彼方へ消えた。

練吟  
×モ 長じけ

○参考資料の提示が目的ですので、結論は省きます。先ごろ県指導者吟道講座があり、その俳句部門で木村岳風先生の「なが霖や」が課題になったので、どこの教場でも練習が行われたこと、思います。この「なが霖や」の句ですが、朗詠集の記載内容に少々疑問が出ていますので、その問題点を要約して掲げてみることにします。

○朗詠集の句（以下・は筆者が付す）

なが霖や栗の花浮く濼

教本の句の「読み方」は（ながじけやくりのはなうくたまりみず）となっています。ところが、次の頁の写真版の連木では

霖雨や栗の花浮く濼

となつています。そして教本の「参考」でこの句は「木村岳風伝」にはじめて紹介されたもので、その連木（筆者注・連木は誤用、正しくは「聯」）は、岳風記念館に保存されていると説明してあります。

○「木村岳風伝」所載の記事は次のとおり（藤森岳字総本部現理事の先生回想記）

九段の二階の教場で、木村先生は時折りお国言葉を交えてお話しされたので、私の心はほぐれ、父から聞いていた、岳風

先生が青年時代、俳句の会で天位に入賞された「長じけや栗の花浮くたまり水」の句を思い出して申し上げたことを、今もはっきりと記憶している。

（因みに藤森理事の少年時のお宅は、岳風先生の生家と道路を間に向い合っていた）  
○「語釈」霖（一字でながあめと訓む）三日以上降り続く雨の意で霖雨の熟語がある。写真の「霖雨や」はながあめとルビを振らないと無理。「長じけや」は（長湿気や）と解すると教本の「通釈」（あゝ、あゝいつまでもいつまでも降り続く雨だ）にびつたりです。「しけ」を関東的に「時化」（海の荒れ）と解するのは無理。従つて、「岳風伝」の「長じけや」と平仮名書きにした理由が納得できる。なお、下五の「濼」を（たまりみず）と読んでいますが「濼」の音は「ロウ」で、訓は（にわたづみ）であり（たまりみず）はその意味になります。ですからこの句の場合（にわたづみ）と読んだ方がきれいな感じがするようです。

○大雑把な説明でお分かりにくかったと思いますが、以上の三句はどれも木村先生直の作品ではないので、字句や読みに相違が生じたのは致し方ありません。どうか教本をよくお読みいただき、教本どおりの素晴らしい俳句の朗詠をされるよう期待します。

◎ 寄稿のお願い

当月報「傾心」も早いもので200号も間近となりました。「みなさんの月報・傾心」です。ぜひ多くの皆さんの投稿をお願いします。詩吟に多少なりとも関連ある記事でしたらなんなりとお寄せ下さい。きたんない御意見、無記名投稿も可。古参、新入会者を問わずどしどし投稿をお願いします。（広報部）

（入会）

853 伊藤和子 逗子市逗子一―九―二六

（逗子A）（電）〇四六八一七―二一六六

854 守屋悦子 葉山町堀内一―三―七

（堀内・F）（電）〇四六八一七五―一〇八一

（退会）

521 中村虎山（若葉）（死）724 森 亜紀（逗子A）

異常気象による雨降り、蒸し暑さにはささかうんざりしていたが、九月に入ったら何とはなしに秋を感じホッと息……。季節は確実に動いているようです。査定も近づいた稽古日の夜、練習に励む吟声に負けじとばかり、庭のこおろぎがしきりと啼いていました。

秋の行事が次々と待っています。さあこの辺でやる気を出してがんばりましょう。